

ピーマン葉こぶ症の発生に及ぼす被覆フィルムおよび湿度の影響



写真1 ピーマン葉こぶ症の症状 (葉)



写真2 ピーマン葉こぶ症の症状 (果実)

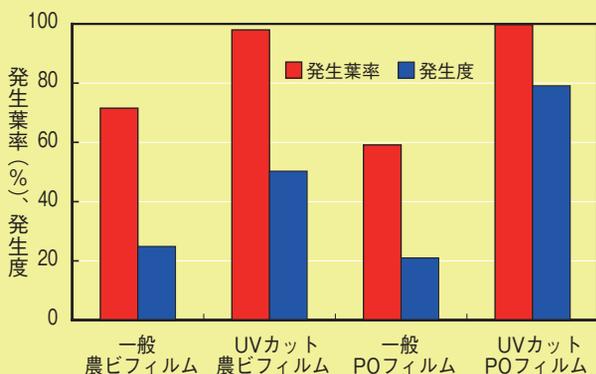


図 UV カットフィルムがピーマン葉こぶ症の発生に及ぼす影響

発生度 = $\sum (\text{指数別葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査葉数} \times 3) \times 100$ 、指数: 0: 発生なし、1: 主脈にわずかに散見される、2: 多くの主脈や葉脈に突起状のこぶ症が見られる、3: ほとんどの主脈や葉脈に突起状のこぶ症が見られ、葉脈間や葉柄にも発生が見られる

以前から、ピーマンおよびシシトウにおいて、葉の葉脈や果実のへた、果梗に突起状のこぶが生じる症状(写真1、2)が発生していました。本症状の原因は不明ですが、トマトに発生する葉こぶ病に類似していることから、通称、葉こぶ症と呼ばれています。近年、紫外線除去フィルム(UVカットフィルム)を使用したハウスで、春先から初夏に曇雨天が続いた場合に、果実の品質が損なわれるほど激しく発生する場合が見られたことから、本症状の発生に及ぼす被覆フィルムおよび湿度の影響について調査しました。

その結果、UVカットフィルムを使用する

表 湿度制御がピーマン葉こぶ症の発生に及ぼす影響

試験反復	区名	発生程度 ^{b)}	平均相対湿度(%)
1	湿度制御区 ^{a)}	0	97.2
	無制御区	1.7	98.9
2	湿度制御区 ^{a)}	1.0	97.3
	無制御区	2.0	99.0

a) 葉面結露しない程度に除湿器を稼働させた

b) 0: 発生なし~3: 発生多い

と、一般フィルムよりも発生が助長されることが確認されました(図)。また、湿度が高いと発生しやすく、葉面結露しない程度に湿度制御すると発生が抑制されました(表)。しかし、UVカットフィルムを使用して湿度制御しても、湿度制御しない一般フィルムの場合よりも発生が多く(データ省略)、UVカットフィルムが本症状の発生に大きな影響を及ぼしていると考えられました。

なお、本症状の発生には病原菌は関与していないと考えられています。

(病理担当 矢野和孝・下元祥史

088-863-4915)